行人行歌

若山牧水

行人行歌

牧水

行人行歌

牧水

現代和歌選集叢書
第二編
植竹書院發行

いかなればこゝろの
はしめにたかくほかり
さびしきことを
おもひたまふる
牧水

いかなればことひの
はじめにかくばかり
さびしきことを
おぼしたまふぞ

牧水

凡例

本書には「別離」「路上」「死か藝術か」「みなかみ」「秋風の歌」の五歌集、卽ち明治四十年頃より大正三年に至るまでの作約三千首のうちより自ら抄出せるものを輯めたり。概ね東京に在りての作なれどたゞ「みなかみ」一卷のみは全部わが鄕里日向國に歸省中の詠なり。

自作中よりその一部を選み出すといふは誠に難き業なり、本書の印刷校正に當りてこの感甚だ深し、たゞ忍び難き駄作中よりその幾分を削除し得たりと見ば或は自ら慰まむか。

大正四年四月

相州北下浦の海濱にて

著者

目次

別離……一
路上……六七
死か藝術か……一三
みなかみ……一六三
秋風の歌……二二

別離

上卷

水の音に似て啼く鳥よ山ざくら松にまじれる深
山の晝を

なにとなきさびしさ覺え山ざくら花ちるかげに
日を仰ぎ見る

行きつくせば浪青やかにうねりゐぬ山ざくらな
ど咲きそめし町

母戀しかかるゆふべのふるさとの櫻咲くらむ山
の姿よ

父母よ神にも似たるこしかたに思ひ出ありや山
ざくら花

春は來ぬ老いにし父の御ひとみに白ううつらむ
山ざくら花

吾木香すすきかるかや秋くさのさびしききはみ
君におくらむ

秋晴や空にはたえず遠白き雲の生れて風ある日
なり

秋の雲柿と榛との樹樹の間にうかべるを見て君
も語らず

秋の夜こよひは君の薄化粧さびしきほどに靜か
なるかな

君去にてものの小本のちらばれるうへにしづけ
き秋の夜の灯よ

いと遠き笛を聽くがにうなだれて秋の灯のまへ
ものをこそおもへ

靜けさや君が裁縫の手をとめて菊見るさまをふ
と思ふとき

君は知らじ君の馴寄るを忌むごときはかなごころのうらさびしさを

相見ねば見む日をおもひ相見ては見ぬ日を思ふさびしきこころ

ふとしては君を避けつつただ一人泣くがうれしき日もまじるかな

■

立川の驛の古茶屋さくら樹の紅葉のかげに見おくりし子よ

霧ふるや細目にあけし障子よりほの白き秋の世の見ゆるかな（二首御嶽にて）

霧白ししとしと落つる竹の葉の露ひねもすや月となりにけり

なつかしき春の山かな山すそをわれは旅びと君おもひ行く（二首高尾山）

思ひあまり宿の戸押せば和やかに春の山見ゆうち泣かるかな

日のひかり水のひかりの一いろに濁れるゆふべ大利根わたる

けふもまたこころの鉦をうち鳴しうち鳴しつつ
あくがれて行く　（三首中國を巡りて）

幾山河越えさり行かば寂しさの終てなむ國ぞ今
日も旅ゆく

峡縫ひてわが汽車走る梅雨晴の雲さはなれや吉
備の山山

日向の國都井の岬の青潮に入りゆく端に獨り海
見る　（六首日向にて）

大うねり風にさからひ青うゆくそのいただきの
白玉の波

港口夜の山そびゆわが船のちひさなるかな沖さ
して行く

かたかたとかたき音して秋更けし沖の青なみ帆
のしたにうつ

夕さればいつしか雲は降り來て峯に寢るなり日
向高千穂

秋の蟬うちみだれ鳴く夕山の樹蔭に立てば雲の
ゆく見ゆ

樹間がくれ見居れば阿蘇の青烟かすかにきえぬ
秋の遠空　（阿蘇山）

やや赤む暮雲を遠き陸の上にながめて秋の海馳
するかな　（周防灘）

山行けば青の木草に日は照れり何に悲しむわが
こころぞも　（箕面山）

われ車に友は柱に一語二語醉語かはして別れ去
りにけり　（大阪にて葩水と別る）

一の札所第二の札所紀の國の番の御寺をいざ巡
りてむ　（三首紀伊路）

粉河寺遍路の衆のうち鳴らす鉦鉦きこゆ秋の樹
の間に

鉦鉦のなかにたたずみ旅びとのわれもをろがむ
秋の大寺

草ふかき富士の裾野をゆく汽車のその食堂の朝
の葡萄酒

晩夏の光しづめる東京を先づ停車場に見たる寂
しさ

明治四十年早春安房の渚にて歌へる、七十
六首のうち。

戀ふる子等かなしき旅に出づる日の船をかこみ
て海鳥の啼く

山ねむる山のふもとに海ねむるかなしき春の國
を旅ゆく

春や白晝日はうららかに額にさす涙ながして海
あふぐ子の

ああ接吻海そのままに日は行かず鳥翔ひながら
死せ果てよいま

接吻くるわれらがまへにあをあをと海ながれた
り神よいづこに

山を見よ山に日は照る海を見よ海に日は照るい
ざ唇を君

いつとなうわが肩の上にひとの手のかかれるが
あり春の海見ゆ

こころまよふ照る日の海へ中ぞらへうれひねむ
れる君が乳の邊へ

砂濱の丘をくだりて木の間ゆくひとのうしろを
見て涙しぬ

ともすれば君口無しになりたまふ海な眺めそ海
にとられむ

君かりにかのわだつみに思はれて言ひよられな
ばいかにしたまふ

涙もつ瞳つぶらに見はりつつ君かなしきをなほ
語るかな

君さらに笑みてものいふ御頬の上にながるる涙
そのままにして

立ちもせばやがて地にひく黒髪を白もとゆひに
結ひあげもせで

このごろの寂しきひとに強ひむとて葡萄の酒を
もとめ來にけり

闇の夜の浪うちぎはの明るきにうづくまりゐて
蒼海を見る

白鳥はかなしからずや空の青海のあをにも染まず
ただよふ

かなしげに星か降るらむ戀ふる子等こよひはじめて添寢しにける

ものおほく言はずあちゆきこちらゆきふたりはかなし貝をひろへる

渚ちかく白鳥群れて啼ける日の君がかほより寂しきはなし

浪の寄る眞黒き巖にひとり居て春のゆふべの暮れゆくを見る

夕海に鳥啼く闇のかなしきにわれら手とりぬあ
はれまた啼く

わがうたふかなしき歌やきこえけむゆふべ渚に
君も出で來ぬ

くちづけの終りしあとのよこ顔にうちむかふ晝
の寂しかりけり

いかなれば戀のはじめに斯くばかり寂しきこと
をおもひたまふぞ

白晝さびし木の間に海の光る見て眞白き君が額
のうれひよ

ふと袖に見いでし人の落髪を唇にあてつつ朝の
海見る

海女の群からすのごときなかにゐて貝を買ふな
りわが戀人は

くちつけは永かりしかなあめつちにかへり來て
また黑髪を見る

春の海さして船行く山かげの名もなき港晝の鐘
鳴る

大ぞらの神よいましがいとし兒の二人戀して歌
うたふ見よ

君を得ぬいよいよ海の涯なきに白帆を上げぬ何
のなみだぞ

あな沈む少女の胸にわれ沈むああ聽けいづく悲
しめる笛

吹き鳴らせ白銀の笛春ぐもる空裂けむまで君死
なむまで

みじろがでわが手にねむれあめつちになにごと
もなし何の事なし

思ひ倦みぬ毒の赤花さかづきにしぼりてわれに
君せまり來よ

矢繼早火の矢つがへてわれを射よ滿ちて腐らむ
わが胸を射よ

ひたぶるに木枯すさぶ斯る夜を思ひ死なむずわ
が愚鈍見よ

悲し悲し火をも啖ふと戀ひくるひ斯くやすらか
に抱かれむこと

紅梅のつめたきほどを見たまへとはや剛れて君
笑みて唇よす

千代八千代棄てたまふなと云ひすててつとわが
手枕きはや睡るかな

涙さびし夢も見ぬげにやすらかに寢みだれ姿わ
れに添ふ見て

春は來ぬ戀のほこりか君を獲てこの月ごろの悲
しきなかに

床に馴れ羽おとろへし白鳥のかなしむごとくけ
ふも添寢す

君かりにその黒髪に火の油そそぎてもなほわれ
を捨てずや

手枕よ髪のかをりよ添ひぶしにわかれて春の夜
を幾つ寢し

別れ居の三夜は二夜はさこそあれかがなひて見
よはや十日經む

かへれかへれ怨じうたがひに倦みもせばいざこ
の胸へとく歸り來よ

君來ずばこがれてこよひわれ死なむ明日は明後
日は誰が知らむ日ぞ

この手紙赤き切手をはるにさへこころときめく
哀しきゆふべ

戀しなばいつかは斯る憂を見むとおもひし昨の
はるかなるかな

心ゆくかぎりをこよひ泣かしめよものな言ひそ
ね君見むも憂し

怨むまじや性は清水のさらさらに淺かる君をな
にうらむべき

然なり先づ春消えのこる松が枝の白の深雪の君
とたたへむ

われ歌をうたへりけふも故わかぬかなしみども
にうち追はれつつ

みな人にそむきてひとりわれゆかむわが悲しみ
はひとにゆるさじ

あな寂し縛められて默然と立てる巨人の石彫ま
ばや

いと幽けく濃青の白日の高ぞらに鳶啼くきこゆ
死にゆくか地

一すぢの糸の白雪富士の嶺に殘るがかなし水無
月の天

風わたる見よはつ夏のあを空を青葉がうへをや
よ戀人よ

山を見き君よ添寢の夢のうちに寂しかりけり見
も知らぬ山

■

つと過ぎぬすぎて聲なし夜の風いまか靜かに木
の葉ちるらむ

風落ちぬつかれて樹樹の凪ぎしづむ夜を見よ少
女さびしからずや

風凪ぎぬ松と落葉の木の叢のなかなるわが家い
ざ君よ寢む

下卷

いざ行かむ行きてまだ見ぬ山を見むこのさびし
さに君は耐ふるや

いざ行かむ行衛は知らねとどまらばかなしかり
なむいざ君よ夙く

野のおくの夜の停車場を出でしときつとこそ接
吻はかはしけるかな

木の芽摘みて豆腐の料理君のしぬわびしかりに
し山の宿かな

春の日の滿てる木の間にうち立たすおそろしき
までひとの美し

小鳥よりさらに身がろくうつくしくかなしく春
の木の間ゆく君

靜かなる木の間にともに入りしときこころしき
りに君を憎めり

君すててわれただひとり木の間より岡にいづれば春の雲見ゆ

山の家の障子細目にひらきつつ山見るひとをかなしくぞ見し

ゆく春の山に明るう雨かぜのみだるるを見てさびしむひとよ

■

くちつけをいなめる人はややとほくはなれて窗に初夏の雲見る

ひとりなればこの望月の夏の夜のすずしきよひをいざひとり寢む

八月初め信州輕井澤に遊びぬ、歌三十首のうち。

火を噴けば淺間の山は樹を生まず茫として立つ青天地に

八月や淺間が嶽の山すそのその荒原にとこなつの咲く

麓なる山のひとつのいただきの青深草に寢て淺間見る

火の山やふもとの國に白雲の居る夜のそらの一
すぢの煙

夜となればそらを掩ひて高く見ゆ白晝は低しけ
むり噴く山

火の山にしばし煙の斷えにけりいのち死ぬべく
ひとのこひしき

女ありみやこにわれを待つときく靜かなりけり
夜半の山の火

月見草見るつつ居ればわかれ來し子が物思ふす
がたしぬばゆ

ゆるしたまへ別れて遠くなるままにわりなきま
まにうたがひもする

青草のなかにまじりて月見草ひともと咲くをあ
はれみて摘む

ものをおもふ四方の山べの朝ゆふに雲を見れど
もなぐさみもせず

糸のごとくそらを流るる杜鵑あり聲にむかひて
涙とどまらず

ほととぎす聽きつつ立てば一滴のつゆよりさび
しわが生くが見ゆ

胸にただ別れ來しひとしのばせてゆふべの山を
ひとり越ゆなり

■

とき折りに淫唄うたふ八月の燃ゆる濱ゆき燃ゆ
る海見て　（二首故郷にて）

雲去ればもののかげなくうす赤き夕日の山に秋
風ぞ吹く

なにものに欺かれ來しやこの日ごろ口惜し腹立
たし秋風を聽く

いねもせで明かせる朝の秋かぜの聲にまじりて
すずめ子の啼く

野菊ぞとさも媚びなよるすがたして野に咲く見
れば行きもかねつる

秋かぜは空をわたれりゆく水はたゆみもあらず
葦刈る少女

足とめて聽けばかよひ來河むかひ枯葦のなかの
葦刈の唄

行き行きて飽きなば旅にしづやかにかへりみも
なく死なましものを

君見れば獣のごとくさいなみぬこのかなしさを
やるところなみ

かかる時聲はりあげてかなしさを歌ふ癖ありき
それも止みつる

わが住むは寺の裏部屋庭もせに白菊さけり見に
來よ女

ほこり湧く落日の街をひた走る電車のすみのひ
とりの少女

われうまれて初めてけふぞ冬を知る落葉のここ
ろなつかしきかな

いかにせむ胸に落葉の落ちそめてあるがごとき
をおもひ消しえず

いと靜かにものをぞおもふ山白き十二月こそゆ
かしかりけれ

窓あくればおもはぬそらにしらじらと富士見ゆ
る家に女すまひき

別るとて停車場あゆむうつむきのひとの片手に
ヴィオロンの見ゆ

うきことの限りも知らずふりつもるこのわかき
日をいざや歌はむ

枯れしのち最もあはれ深かるは何花ならむなつかしきかな

あさましき歌のみおほくなりにけりものの終りのさびしきなかに

一月より二月にかけ安房の渚に在りき、歌六十九首のうち。

おもひ屈し古ぼろ船に魚買の群とまじりて房州へ行く

海に來ぬ思ひあぐみてよるべなき身はいづくにも捨てどころなく

われひとり多く語りてかへり來ぬ月照る松のなかの家より

ともすれば咯くに馴れぬる血なればとこともなけにも言ひたまふかな

われよりもいささか高きわか松の木かげに立ちて君をおもへり

日は日なりわがさびしさはわがのなり白晝なぎさの砂山に立つ

ここよりは海も見えざる砂山のかげの日向にものをこそおもへ

火の山にのぼるけむりにむかひゐてけふもさび
しきひねもすなりき　（大島見ゆ）

あはれこころ荒みぬればか眼も見えず海を見れ
ども日を仰げども

やまひには酒こそ一の毒といふその酒ばかり戀
しきは無し

あさましく酒をたふべて荒濱に泣き狂へども笑
ふ人もなし

愚かなり阿呆鳥の啼くよりもわがかなしみをひ
とに語るは

わがこころ濁りて重きゆふぐれは軒のそとにも
行くを好まず

けふ見ればひとがするゆゑわれもせしをかしく
もなき戀なりしかな

耳もなく目なく口なく手足無きあやしきものと
なりはてにけり

いつ知らず生れし風の月の夜の明けがたちかく
吹くあはれなり

物かげに息をひそめて大風の海に落ちゆく太陽
を見る

蜑が家に旅寢をすれば荒海の落日にむかひ風呂
桶を据ゆ

青海の鳥の啼くよりいや清くいやかなしきはい
づれなるらむ

好かざりし梅の白きをすきそめぬわが二十五歳
の春のさびしさ

おほろおほろ海の凪げる日海こえてかなしきそ
らに白富士の見ゆ

海のあなたおほろに富士のかすむ日は胸のいた
みのつねに增しにき

安房の國朝のなぎさのさざなみの音のかなしさ
や遠き富士見ゆ

おほろ夜や水田のなかの一すぢの道をざわめき
我等は海へ

おほろ夜のこれは夢かも渚にはちひさき音の斷
えずまろべる

おほろ夜の多人數なりしそがなかのつかね髪な
りしひとを忘れず

このままに無口者となりはてむ云ふべきことは
みな腹立たし

心いよよ獨りをおもふ身にしみていよいよひと
のなさけしげきまま

ニコライの大釣鐘の鳴りいでて夕さりくればつ
ねにたづねき

歸らずばかへらぬままに行かしめよ旅に死ねよ
とやりぬこころを

思ひうみ斷えみ斷えずみわがいのち夜半にぞ風
の流るるを聽く

安房の國海のなぎさの松かげに病みたまふぞと
けふもおもひぬ

海に沿ふ松の木の間の一すぢのみちを獨りしけ
ふも歩むか

君が住む海のほとりの松原の松にもたれて歌う
たはまし

憫れまれあはれむといふあさましき戀の終りに
近づきしかな

かなしきはつゆ掩ふなくみづからをうちさらし
つつなほ戀ひわたる

はや夙くもこころ覺めゐし女かとおもひ及ぶ日
死もなぐさまず

女なればあはれなればと甲斐もなくくやしくも
げに許し來つるかな

憫れぞとおもひいたれば何はおき先づたへがた
く戀しきものを

なにか泣くみづからもわれを欺きし戀ならぬか
は清く別れよ

林なる鳥と鳥とのわかれよりいやはかなくも無
事なりしかな

別るとて冷えまさりゆく女にはわが泣くつらの
いかにうつれる

かへりみてしのぶよすがにだもならぬ斯る別れ
をいつか思ひし

別れといふそれよりもいや耐へがたしすさみし
我をいかに救はむ

戀ひに戀ひうつつなかりしそのかみに寧ろわかれてあるべかりしを

いつまでを待ちなばありし日のごとく胸に泣き伏し詫ぶる子を見む

詫びて來よ詫びて來よとぞむなしくも待つくるしさに男死ぬべき

ふとしては何も思はずいとあさきかりそめごとに別れむとおもふ

斯くばかりくるしきものをなにゆゑに泣きて詫びしを許さざりけむ

おもひやるわが生のはてのいやはてのゆふべまでをか獨りなるらむ

やうやうにこころもしづみ別れての後のあはれを味はむとす

■

灯赤き酒のまどゐもをはりけりさびしき床に寢にかへるべし

冷笑すいのち死ぬべくここちよく涙ながしてわれ冷笑す

死ぬばかりかなしき歌をうたはましよりどころ
なく身のなりてきぬ

わがめぐりいづれさびしくよるべなきわかきい
のちが數さまよへり

さびしきはさびしきかたへさまよへりこのあは
れさの耐へがたきかな

花つみに行くがごとくにいでゆきてやがて涙に
ぬれてかへり來ぬ

櫛とればこころいささか晴るるとてさびしや人
のけふも髪をゆふ

おぼろなる春の月の夜落葉のかげのごとくもわ
れのあゆめり

まどかけをひきて寢ぬれば春の夜の月はかなし
く窻にさまよふ

首たかくあげては春のそらあふぎかなしげに啼
く一羽の鵜鳥

海の邊に行きて立てどもなぐさまず死をおもへ
どもなほなぐさまず

根の知れぬかなしさありてなつかしくこころを
ひくに死にもかねたる

ふたたびはかへり來ることあらざらむさなりい
かでかまたかへり來む

ほのかなるさびしさありて身をめぐるかなしみ
のはてにいまか來にけむ

見るかぎり友の顔みな死にはてしさびしきなか
に獨りものをおもふ

疲れはて窓をひらけばおほろ夜の嵐のなかにな
く蛙あり

しめやかに嵐みだるるはつ夏の夜半のあはれを
寢ざめながむる

玻璃戸漏り暮春（ぼしゅん）の月の黄に匂ふ室（へや）に疲れてかへ
り來しかな

ガラス戸にゆく春の風をききながら獨り床敷き
ともしびを消す

四月すゑ風みだれ吹くこよひなりみだれてひと
のこひしき夜なり

また見じと思ひさだめつさりげなく靜かにひと
を見て別れ來ぬ

めぐりあひやがてただちに別れけり雨ふる四月
すゑの九日（ここのか）

あをあをと若葉萠えいづる森なかに一もと松の
花咲きにけり

窓ちかき水田のなかの榛の木の日にけに青み嵐
するなり

大木(たいぼく)の青葉のなかに小鳥啼く細(こま)かに晝の日をみ
だしつつ

思ひいでてなみだはじめて頬をつたふ極り知ら
ぬわかれなりしかな

音もなく人等死にゆく音もなく大あめつちに夏
は來にけり

きはみなき生命(いのち)のなかのしばらくのこのさびし
さを感謝しまつる

ひややかにつひに眞白き夏花のわれ等がなかに
あり終りけり

■

あなさびし白晝(まひる)を酒に醉ひ痴れて皐月大野の麥
畑をゆく

畑なかにふと見いでつる痩馬の草食みゐたり水
無月眞晝

遠くゆきまたかへりきて初夏の樹にきこゆなり
眞晝日の風

松咲きぬ楓もさきぬはつ夏のさびしきはなの咲
きそめにけり

夏白晝うすくれなゐの薔薇(さうび)よりかすかに蜂の羽
音きこゆる

黄なる麥一穂ぬきとり手にもちて雲なきもとの
高原(たかはら)をゆく

高原や青の一樹とはてしなき眞白き道とわがま
へに見ゆ

麥畑のなかにうごける農人(のうにん)を見るつつなみだし
づかにくだる

わが顔もあかがねいろに色づきつ高原の麥は垂
穂しにけり

■

ひややかに涙はひとりながれたりこころうれし
く死なむとおもふに

影のごとくこよひも家を出でにけり戸山が原の
夕雲を見に

ひとつひとつ足の歩みの重き日の皐月の原に頬(ほほ)
白鳥(じろ)の啼く

わがいのち空に滿ちゆき傾きぬあなはるかなり
ほととぎす啼く

あめつちに獨り生きたりあめつちに斷えみたえ
ずみひとり歌へり

六七月の頃を武藏野の奥なる山上に送りぬ、歌四十六首のうち。

涙ぐみみやこはづれの停車場の汽車の一室(ひとま)にわ
れ入りにけり

水無月の山越え來ればをちこちの木の間に白く
栗の咲く見ゆ

啼きそめしひとつにつれてをちこちの山の月夜
に梟の啼く

たそがれのわが眼のまへになつかしく木の葉そ
よげり梟の啼く

日を浴びて野ずゑにとほく低く見ゆ涙をさそふ
水無月の山

松林山をうづめて靜まりぬとほくも風の消えゆ
けるとき

眞晝野や風のなかなるほのかなる遠き杜鵑の聲
きこえ來る

梅雨晴の午後のくもりの天地のつかれしなかに
ほととぎす啼く

わが行けば木木の動くがごとく見ゆしづかなる
日の青き林よ

ゆめみしはいづれも知らぬ人なりき寢ざめさび
しく君に涙す

きはみなき旅の途なるひとりぞとふとなつかし
く思ひいたりぬ

ゆふぐれの風ながれたる木の間ゆきさやかにひ
とを思ひいでしかな

放たれし悲哀のごとく野に走り林にはしる七月
のかぜ

松林風の斷ゆればわがこころふるへておもふ黑
髪の香を

かなしきは夜のころもに更ふる時おもひいづる
がつねとなりぬる

鋭くもわかき女を責めたりきかなしかりにしわ
がいのちかな

午後晴れぬ煙草のあまさしとしとに胸に浸む日
ほととぎす啼く

暈帶びて日は空にあり山山に風青暗しほととぎ
す啼く

わがこころ靜かなる時つねに見ゆる死といふも
ののなつかしきかな

秋風吹くつかれて獨りたそがれの露臺にのぼり
空見てあれば　（某新聞社樓上）

いつ知らず重ねて胸に置きたりし双のわが手を
見れば涙落つ

しづやかに大天地に傾きて命かなしき秋は來に
けり

栗の樹のこずゑに栗のなるごとき寂しき戀を我
等遂げぬる

こころ斯く荒みはてぬるわが顏のその唇をおも
ふに耐へず

破れたるたたみのうへに一脚の寢椅子を置きつ
秋の夜を寢る

手をとりて心いささかしづまりぬもの言へば彌(いや)
寂しさの増す

或時はなみだぐみつつありし日の寂しき戀にか
へらむとする

涙落つまぬかれがたき運命のもとにしづかに眼
を瞑ぢむとし

かへり來よ櫻紅葉(さくらもみぢ)の散るころぞわがたましひよ
夙(ど)く歸り來よ

ことごとく落葉しはてし大木にこよひ初めて風
のきこゆる

晴れわたる空より樹より散りきたるああ落葉(らくえふ)の
さまのたのしさ

■

名も知らぬ河のほとりにめぐり來ぬけむり流る
る秋の夕に

身を起しまた忍びかに歩みいでぬ落葉ばやしの
奥の木の間を

手ふるればはららはららと落葉(らくえふ)す林のおくの一
もと稚木(わかぎ)

ながながと地上に身をば横へぬ夕陽の前の落葉
林に

ひややかに落葉林をつらぬきて鐵路走れり限り
を知らず

夕暮のそよ風のなかにいたみ出づ倦みし額に浮
ける蒼さは

ゆふぐれは蒼みて來りまた去りぬ窓邊の椅子に
われの埋るる

ゆふ日さし窓のガラスは赤赤と風に鳴るなり長
椅子に寢る

悲しげに赤き火を見せゆふ闇の椅子に人あり煙
草は匂ふ

容れがたし一度びわれを離れたる汝がこころは
また容れがたし

離れたる愛のかへるを待つごときこの寂しさの
咒ふべきかな

命なりそのくちびるを愛せよと消息に書き涙落しぬ

衰へしひとの額をかきいだき接吻せむとすればあはれ眼を瞑づ

かき抱けば胸に沈みてよよと泣くそのかみの日の少女のごとく

■

半島の國の端なる山かげのちさき港に帆を下しけり（三浦半島）

枝垂れ咲けり暗緑色の浪まろぶ海の岸なる老樹の椿

海岸のちひさき町の生活の旅人の眼にうつるかなしさ

風凪ぎぬ夕陽赤き灣内の片すみにゐて帆をおろす船

春白晝ここの港に寄りもせず岬を過ぎて行く船のあり

路

上

上卷

海底に眼のなき魚の棲むといふ眼の無き魚の戀
しかりけり

わが足の著きたる地もうらさびし彼の蒼空の日
もうらさびし

靜やかにさびしきわれの天地に見えきたるとき
涙さしぐむ

死にがたしわれみづからのこの生命食み残し居
りまだ死に難し

光無きいのちの在りてあめつちに生くとふこと
のいかに寂しき

手を觸れむことも恐しわがいのち光うしなひ生
を貪る

おとろへしわが神經にうちひびきゆふべしらじ
ら雪ふりいでぬ

ゆふぐれの雪降るまへのあたたかさ街のはづれ
の群集の往來

ひとしきりあはく雪ふり月照りぬ水のほとりの
落葉の木立

白粉のこぼれむとする横顔に血の潮しきたりた
そがれにけり

窟かけのすこしあきたるすきまより夜の雪見ゆ
ねむけなる女

醉ひはてて小鳥のごとく少女等はかろく林檎を
投げかはすなり

一時の鐘とほくよりひびきいや深に三月風吹く
夜のなやむかな

枕より離れしときのしづかなる女のひとみわれ
に對へり

■

沈丁花青くかをれりすさみゆく若きいのちのか
なしき春に

われ歌をうたひくらして死にゆかむ死にゆかむ
とぞ涙を流す

なほ耐ふるわれの身體をつらにくみ骨もとけよ
と酒をむさぼる

酒すすればわが健かの身のおくにあはれいたま
しき寂しさの燃ゆ

あな寂し酒のしづくを火に落せこの薄暮の部屋
匂はせむ

酒のためわれ若うして死にもせば友よいかにか
あはれならまし

光線のごとく明るくこまやかにこころ衰へ人を
厭へり

おとろへの極みに來けむ眼に滿てるあらゆる人
の憎し醜し

蹌踉と街をあゆめば大ぞらの闇のそこひに春の
月出づ

深深と赤き灯よどむいろ街を醉うて走れば足音
がする

ひとつ飲めばはやくも紅く染まる頰の友もわが
眼にさびしかりけり

親も見じ姉もいとはしふるさとにただ檳榔樹を
見にかへりたや

衰へてひとの來るべき野にあらず少女等群れて
摘草をする　（四首戸山が原にて）

めづらかに野に出で來ればいちはやく日光に醉
ひつかれはてける

つみ草のそのうしろかげむらさきの匂へる衣の
かなしかりけり

梢あをむ木蔭にすわりつみ草のとほき少女を見
やるさびしさ

風光り櫻みだれて顏に散るこころ汗ばみ夏をお
もへる

いちはやく四月の街に青く匂ふ夏帽子をばうち
かつぎけり

かのをとめ顔の醜し多摩川にわか草つみに行か
むとさそふ

われ二十六歳歌をつくりて飯に代ふ世にもわび
しきなりはひをする

頰をすりて雌雄の啼くなりたそがれの花の散り
たる櫻にすずめ

月の夜半醉ひざめの身のとほとほとあゆめる街
の夏の木の影

貧しければ心も暗し蟲けらの在り甲斐もなき生
きやうをする

やうやくに待ちえしごとくわがこころあまえて
ありぬ病みそめし身に

命より摘みいだすべき一すぢのさびしさもなし
かなしさも無し

思ひいでて寢ぬ夜しもなきあはれさの二年を經
てなほつづくらむ

なほもかく飽くことしらずひとを思ふわれのこ
ころのあはれなるかな

ふらふらと野にまよひ來ればいつのまにさびし
や麥のいろづきにけむ

はらみたる黑き小犬の媚びもつれ歩みもかねつ
青き草原

いつ知らず摘みし蓬の青き香のゆびにのこれり
停車場に入る

わがいのち盡きなばなむぢまた死なむわが歌よ
汝をあはれに思ふ

花見ればはなのかはゆし摘みてまし摘むともな
にのなぐさめにせむ

六月中旬、甲州の山奥なる某溫泉に遊ぶ、
歌二十首のうち。

雲まよふ山の麓のしづけさをしたひて旅に出で
ぬ水無月

たひらなる武藏の國のふちにある夏の山邊へ汽
車の近づく

辻辻に山のせまりて甲斐のくに甲府の町は寂し
夏の日

雲おもくかかれる山のふもと邊に水無月松の散
り散りに立つ

山あひのちさき停車場ややしばし汽車のとまれ
は雲降りきたる

山山のせまりしあひに流れたる河といふものの
寂しくあるかな

わが對ふあを高山の峯越しにけふもゆたかに白
雲の湧く

おほどかに夕日にむかふ青山のたかき姿を見れ
ばたふとし

木の葉みな風にそよぎて裏がへるあを山に人の
行けるさびしさ

しらしらととほき麓をながれたる小川ながめて
夕山を越ゆ

わが小枝子思ひいづればふくみたる酒のにほひ
の寂しくあるかな

■

めづらかに明るき心さしきたりたまゆらにして
消えゆきしかな

枕敷きすひ終りたるひとすぢのけむりにこころ
なぐさめて寢む

あかつきの寢覺の床をひたしたるさびしさのそこに眼をひらくなり

なげやりのあまきつかれにうち浸り生きて甲斐あるけふを讃へむ

衰ふる夏のあはれとなげやりのこころのすゑと相對ふかな

涙ややにうかび出づればせきあげしかなしみは早や消えて影なし

影さへもあるかなきかにうちひそみわがいのちいま秋を迎ふる

君住まずなりしみやこの晩夏の市街の電車にけふも我が乘る

蟬とりの兒等にをりをり行き逢ひぬ秋のはじめの風明き町

をみなへしをみなへし汝をうちみればさやかに秋に身のひたるかな

またさらにこぞの秋まで知らざりしいのちの寂に行きあへるかな

九月切めより十一月半ばまで信濃國に遊べり、歌九十六首のうち。

名も知らぬ山のふもと邊過ぎむとし秋草のはな
を摘みめぐるかな

朴の木に秋の風吹く白樺に秋かぜぞふく山をあ
ゆめば

秋晴のふもとをしろき雲ゆけり風の淺間の寂し
くあるかな

酒飲めばこころ和みてなみだのみかなしく頬を
ながるるは何ぞ

胡桃とりつかれて草に寢てあれば赤とんぼ等が
來てものをいふ

かたはらに秋ぐさの花かたるらくほろびしもの
はなつかしきかな

白玉の齒にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲
むべかりけれ

かなしみに驕りおごりてつかれ來ぬ秋草のなか
に身を投ぐるかな

小諸なる醫師の家の二階より見たる淺間の姿の
さびしさ

秋風のそら晴れぬれば千曲川白き河原に出てあ
そぶかな

薄暗きこころ火に似て煽り立つ野山もうごき秋
かぜの吹く

顔ぢうを口となしつつ雙手して赤き林檎を嚙め
ば悲しも

秋くさの花のさびしくみだれたる微風のなかの
われの横顔

秋くさのはなよりもなほおとろへしわれのいの
ちのなつかしきかな

われになほこの美しき戀人のあるといふことが
かなしかりけり

松山の秋の峽間に降り來れば水の音ほそしせき
れいの飛ぶ

うちしのび都を落つる若人に朝の市街は青かり
しかな

身もほそく銀座通りの木の蔭に人目さけつつ旅
をおもひき

かへり來て家の背戸口わが袖の落葉松の葉をは
らふゆふぐれ

せきあげてあからさまにも小石めく涙わりなき
小夜もこそあれ

衰ふる夏の日ざしにしたしみて晝も咲くとや野の月見草

長月のすゑともなればほろほろと落葉する木のなつかしきかな

沈みゆく暗きこころにさやるなく家をかこみてすさぶ秋風

こころややむかしの秋にかへれるか寢覺うれしき夜もまじりきぬ

黄なる山まれに聞ゆる落葉はかなしき酒の香に似たるかな

秋かぜの信濃に居りてあを海の鷗をおもふ寂しきかなや

投げやれ投げやれみな一切を投げ出せ旅人の身に前後あらすな

秋かぜの都の灯かげ落ちあひて酒や酌むらむかの挽歌等は（友を憶ふ）

こほろぎの入りつる穴にさしよせし野にまろび寢の顔のさびしさ

さらばいざさきへいそがむ旅人は裾野の秋の草枯れてきぬ

火の山のいただきちかき森林を過ぎらむとして
こころいためり

雲去れば雲のあとよりうすうすと煙たちのぼる
淺間わが越ゆ

火の山の老樹の樅のくろがねの幹をたたけば葉
の散り來る

風立てばさとくづれ落ち山を這ふ火山の煙いた
ましきかな

見よ旅人秋のすゑなる山山のいただき白く雪つ
もり來ぬ

眼をとめて暮れゆく山に對ふ時しみじみと身の
あはれなりけり

あの男死なばおもしろからむぞと旅なるわれを
友の待つらむ

惶しき旅人のこころ去りあえず秋の林に來て坐
れども

秋の森ふと出であひし溪間より見れば淺間に煙
斷えて居り

溪あひの路はかなしく白樺の白き木立にきはま
りにけり

忘却のかけかさびしきいちにんの人あり旅をな
がれ渡れる

蟲けらの這ふよりもなほさびしけれ旅は三月を
こえなむとする

終りなき旅と告げなばわがむねのさびしさなに
と泣き濡るるらむ

はつとしてわれに返れば滿目の冬草山をわが歩
み居り

冬枯の黄なる草山ひとりゆくうしろ姿を見むひ
もなし

嶺の草わがよこたはるかたはらに秋の淡雪きえ
のこり居り

かかる時ふところ鏡戀しけれ葉の散る木の間わ
が顔を見む

蒼空ゆ降り來てやがて去り行きぬ山邊の雲もあ
はれなるかな

いただきの秋の深雪に足あとをつけつつ山を越
ゆるさびしさ

冬草山鳥の立つにもあめつちのくづれしごとき
驚きをする

ものおもひ斷ゆれば黄なる落葉の峽のおくより
水のきこゆる

秋の日の空をながるる火の山のけむりのすゑに
いのちかけけれ

なつかしやわがさびしさにさしそひて秋のあは
雪ふりそめにけり

あはれなる女ひとりがすむゆゑにこの東京のさ
びしきことかな　（以下歸京して）

人知れず旅よりかへりわが友のめうとの家にね
むる秋の夜

友が子のゆふべさびしき泣顔にならびてものを
おもふ家かな

友のごとく日ごと疲れてかへり來むわが家とい
ふが戀しくなりけり

終りたる旅を見かへるさびしさにさそはれてま
た旅をしぞおもふ

われを見にくらき都會のそこ此處に住み居る友
がみなつどひ來る

電燈のさびしきことよ旅路よりかへりて友が顔
を見る夜

下卷

わがままは狂へる馬のすがたしきつかれて今は
横はるかな

かいかがみ路ばたの石手に取れば涙はつひに頬
にまろびいづ

歸るといふ世にいとはしきことのあり夜更けて
けふもとぼとぼ歸る

歩きつつひとり言いふはしたなき癖さへいつか
身につきしかな

鏡よりしづめる瞳われを見る死に對ふごとなつ
かしきかな

雪ふれり暗きこころの片かはにほのあかりさし
ものうきゆふべ

『あれ見給へ落葉木立の日あたりにすまひよげな
る小さき貸家』

路ばたの枯葉ばやしの日あたりにくるわがへり
のいつ寢入りけむ

つらかりしもののおもひでなつかしくなりゆく
ころもうらさびしけれ

蝙蝠に似むとわらへばわが暗きかほの蝙蝠に見
ゆるゆふぐれ

ただひとり離れて島に居るごときこころ暫くう
ごかぬゆふべ

賣りすてし銀の時計をおもひ出づこがらし赤く
照りかへす部屋

ゆふまぐれ赤いんきもてわが歌をなほしてゐし
が酒の飲みたや

ほんのりと酒の飲みたくなるころのたそがれが
たの身のあぢきなさ

ややすこし遲れて湯より出るひとを待つ身かな
しき上草履かな

槇の葉のあをの葉ずゑにつもる雪きゆるゆきを
ば見てありしかな

白粉のあまきかをりも身にのらぬ湯あがりびと
をなにとすべけむ

かの友もこの友もみな白玉(しらたま)のこころ濁らずさび
しきわれかな

風のごとくあとさきもなき苦笑(にがわら)ひつらにうかび
ぬ獨り坐るに

ひとりひとり親しきひとと離れゆくこのはかな
さの棄てがたきかな

松も見ゆしら梅も見ゆ或るころのさびしき安房
をおもひ出づれば

梅やらむとわれをさがして來しひとと松のはや
しに行きあひしかな

梅つぼむころともなればいづくよりこのかなし
さは身にかへるらむ

いづくまでわれをあはれむはて知らぬ汝がこころは海かさびしや

■

移り來て窓をひらけば三階のしたの古濠舟ゆきかよふ（飯田河岸）

さびしさのとけてながれてさかづきの酒となるころふりいでし雪

ふる雪になんのかをりもなきものをこころなにとてしかはさびしむ

はつとしてこころ變れば蒼暗くそこひも見えず降るそらの雪

濠のはた獨りをとこがねる家ぞこころして漕げした通ふ舟

がらす戸に白くみだれてふれる雪よりそひて見れば寂しきものか

■

わが袖にひとつふたつがきえのこる雪もさびしや酒やにのぼる

身もおもく酒のかをりはあをあをと部屋に滿ち
たり醉はむぞ今夜

いざいざと友に杯すすめつつ泣かまほしかり醉
はむぞ今夜

たまたまにただひとりして郊外にわが出で來れ
ば日の曇りたる

多摩川のあさきながれに石なげてあそべば濡る
るわがたもとかな

瀨もあさく藍もうすらに多摩川のながれてあり
ぬ憂しや二月は

多摩川の砂にたんぽぽ咲くころはわれにもおも
ふ人のあれかし

曇日の川原の藪のしら砂にあしあとつけて啼く
千鳥かな

川千鳥啼く音つづけば川ごしの二月の山の眼に
痛み來る

山のかげ水見てあればさびしさがわれの身とな
りゆく水となり

行くなかれかの人情のかなしきになれがいのち
のなにと耐へむや

石拾ひわがさびしさのことごとく乘りうつれと
て空へ投げ上ぐ

■

枝葉のみ眞暗くおもく打ち茂り根は枯るる樹か
こころさびしき

夜の牛乳飲みつつおもひふらふらと淺間の烟に
走るさびしさ

いつとなくわれと身體をたのむこと薄らぎそめ
て在りぬ晝夜

わだつみの底の濁りか手をつかねものうき空の
もとに棲みたる

さびしさは蝶にかも似むこころにはつゆかかは
らず過ぐす朝夕

松おほき彼の鎌倉の古山に行かばや風のなかに
海見む

■

軒したは濁れる海邊手に持つは畫のくるわの淺
きさかづき

手をうちて踊れるわれのあはれさになほ手をう
ちてしきりに踊る

かたはらにならぶ銚子の三つふたつ早やうらさ
びしゐひそめしかな

かたはらの女去りたるこころよさなみだのごと
き朝の酒かな

ちひさなる舟にわが乘りふらふらと漕ぎいでて
ゆく春の濁り江

街暗くかすめる裏の濁り江にい群れて啼かぬ海
の白鳥

濁り江はかすみて空もかき垂れぬわが居る舟に
啼き寄る鷗

枯草にわが寢て居ればそばちかく過ぎる子供の
なつかしきかな

われとべは犬も走りぬ目のかぎり薄日流れてか
なしき野邊に

枯草にわが寢て居ればあそばむと來て顏のぞき
眼をのぞく犬

ゆふまぐれ遊びつかれてあゆみ寄る犬と瞳のひ
たと合ひたる

うす曇りなまあたたかき冬の日に犬とあそぶは
かなしきことぞ

ましぐらにわれを馳け拔き立ちどまり振返る犬
の眼を打擲(てうちやく)す

膝にゐて深き毛を垂れ樫の葉に夕日散るときわ
が小犬鳴く

■

若き日をささげ盡くして嘆きしはこのありなし
の戀なりしかな

はじめより苦しきことに盡きたりし戀もいつし
か終らむとする

おもかげの移るなかれとひとのうへにいのりし
ことはまたくあれども

五年(いつとせ)にあまるわれらがかたらひのなかの幾日を
よろこびとせむ

一日だにひとつ家にはえも住まずえ忘れもせず
心くさりぬ

わがために光ほろびしあはれなるいのちをおも
ふ日の來ずもがな

ありなしの貧しき戀にいかなればわが泣くこと
の斯くも繁なる

わびしさやふとわが立てる足もとの二月の地を
見て歩み出づ

誰にもあれ人見まほしきこころならむけふもふ
らふら街出で歩く

三階の玻璃窓つつみ煤烟のにほへるなかにひと
り酒煮る

そこはかと深山の松葉ちることか寢ざめのここ
ろ寄るところなし

明けがたの床に寢ざめてわれと身の呼吸するこ
ともなにぞさびしき

先づ啼くは濁る濠邊の鶺鴒(いしたたき)ほの青き朝を寢ざめてあれば

かなしくもいのちの暗さきはまらばみづから死なむ砒素をわが持つ

遠海のひびくに似たるなつかしさわが眼のまへの砒素に集る

なとがめそ腐るいのちを恐ろしみなつかしくこそ砒素をわが持て

まなこ閉ぢ口をつぐめるさびしさに得耐へずついと立てど甲斐なし

ふるさとの美美津の川のみなかみにひとりし母の病みたまふとぞ

さくら早や背戸の山邊に散りゆきしかの納戸(なんど)にや臥したまふらむ

病む母よかはりはてたる汝(なれ)が兒を枕にちかく見むと思ふな

病む母を眼とぢおもへばかたはらのゆふべの膳に酒の匂へる

む母をなぐさめかねつあけくれの庭や掃くら
むふるさとの父

■

終に身を酒にそこなひふるさとへ歸るか春のさ
びしかるらむ　（友　）

眼も鈍くこころくもればおのづから眉さへ重し
春の街見ゆ

靜かなりし日にかへらむとこころより思へるご
としわれのよこ顔

誰ぞひとりほほゑめばみないちように酒をしぞ
思ふ部屋のゆふぐれ

まさむねの一合瓶のかはゆさは珠にかも似む飲
まで居るべし

■

河を見にひとり來て立つ木のかげにほのかに書
を啼く蛙あり　（以下下總の海岸にて）

眼とづるはさびしきくせぞおほぞらに雲雀啼く
日を草につくばひ

根のかたにちさく坐れば老松の幹よりおもく風降り來る

耐へがたくまなこ閉づればわが暗きこころ梢に松風となる

波もなき海邊の砂にわが居れば空の黄ばみて春の月出づ

なぎさ邊の藻草昆布のむらがりのなつかしいかな春の月出づ

しら砂にかほをうづめてわれ禱るかなしさに身をやぶるまじいぞ

このこころ慰むべくばあめつちにまたなにものの代ふるあらむや

衣ぬげば五月の松のこずゑより日あをく流れ肌に匂へる

かたはらの地を見詰めて松の根にわれの五月をさびしがるかな

松の葉のしげみにあかく入日さし松かさに似て啼ける山雀

こまやかに松の落葉の散りばへるつちより蟬の
子の這ひ出づる

ゆく春のゆふ日にうかみあかあかとさびしく松
の幹ならぶかな

わが肌の匂ふも肌のうへを這ふ蟻のあゆみもさ
びしき五月

松ばやしわが寢て居ればひらひらと啼いて燕が
まひ過ぎしかな

あなあはれいつかとなりの楢の葉に這ひもうつ
れる簑蟲の子よ

下總の國に入日し榛はらのなかの古橋わが渡る
かな　（以下下總新利根河畔にて）

ただひとり杉菜のふしをつぐことのあそびをぞ
する河のほとりに

藪すずめ群るる田なかの停車場にけふも出で來
て汽車を見送る

しろき花散りつくしたる下總の梨の名所のあさ
き夏かな

あめつちの青くけぶれる河の邊の葭原に巣をま
もる葭切鳥

榛はらのあをくけぶれる下總に水田うつ身はさ
びしからまし

死か藝術か

手術刀

蒼ざめし額(ひたひ)つめたく濡れわたり月夜の夏の街を
我が行く

わが家に三いろふたいろ咲きたりし夏くさの花
も散り終りけり

かなしくも痛みそめたるものおもひ守りて一日(ひゞひ)
もの喰(た)べず居り

野にひとり我が居るゆゑかこのゆふべ木木のさびしく見えわたるかな

粟刈れるとほき姿のさびしきにむかひて岡にあを草を籍く

おほいなる青の朴の葉ひと葉持ち林出づればわが身さびしも

いかに悲しく秋の木の葉の散ることぞ髪さへ痛めいのち守らむ

わが痛めるいのちの端に觸れ觸れて秋の木の葉の散りそめにけり

なにに然かおびゆるものぞ我がいのち身をかためたるすがた寂しも

わが手より松の小枝にとびうつる猫のすがたのさびしきたそがれ

ただひとつ風にうかびてわが庭に秋の蜻蛉のながれ來にけり

しのびかに遊女が飼へるすず蟲を殺してひとりかへる朝明け

なにやらむ思ひあがりて眼も見えず秋の入日の街をいそぎぬ

酒無しにけふは暮るるか二階よりあふげば空を
行く烏あり

我がうしろ影ひくごとし街を過ぎひとり入りゆ
く秋植物園

うなだれて歩むまじいぞ櫻落葉うす日にひかり
はらはらと散る

其處に在り彼處にみえしわがすがたさびしや夜
の街に霧降る

秋かぜや日本(やまと)の國の稻の穗の酒のあぢはひ日に
まさり來れ

動物園のけものの匂ひするなかを歩むわが背の
秋の日かげよ

身も世もなく兒をかはゆがる親猿の眞赤きつら
に石投げつけむ

秋の入日猿がわらへばわれ笑ふとなりの知らぬ
人もわらへる

秋の日の動物園を去らむとしかろき眩暈(めまひ)をおぼ
えぬるかな

はつとして歩みをとどめなにやらむ拂ふがごと
く癖ぞ袖振る

停車場に入りゆくときの靜かなるこころよ眼に
うつる人のなつかし

わびしやなまたも夜つゆの軒したにかへりて雨
戸たたかねばならず

眼の見えぬ夜の蠅ひとつわがそばにつきゐて離
れず恐しくなりぬ

眼馴れたるこの樹四時に落葉せず黑き實ぞなる
秋風立てば

かなしくも我を忘れてよろこぶや見よ野分こそ
樹に流れたれ

いつとなく秋のすがたにうつりゆく野の樹樹を
見よ靜かなれこころ

秋となり萩はな咲けばおどろきてさしぐむここ
ろ見るにしのびず

落葉と自殺

手探れど手には取られず眼開けば消えて影無し
さびしあな寂し

自殺といふを夢みてありきかなしくも浮草のごとく生きたりしかな

窓ひらけばぱつと片頰に日があたるなつかしいかな秋もなかばなり

枯草のわが身にあはれ血のごとく夜深き市街雨落ちきたる

雨雨雨まこと思ひに勞れるきよくぞ降り來しあはれ闇を打つ

窓ひとつ北にひらきてうす暗きこの部屋の好よさよ友が椅子に倚る

法隆寺のまへの梨畑梨の實をぬすみしわかき旅人なりき　（旅を憶ふ二首）

大和の國耳なし山の片かげの彼の寺の扉をたたかばや此の手

茶の花を摘めばちひさき黒蟻の蕋にひそめりし
みじみ見て棄つ

わが身は地畑のくろつち冬の日の茶の花のなど
したしいかなや

相模の秋おち葉する日の友が妻わすられぬ子に
似てうつくしき

縁がわの君が眞紅のすりつぱをふところにして
去なむとぞおもふ

ほどもなく動きいだせる夜の汽車の片すみにわ
れ靜かに眼をもづ

あをあをと海のかたへにうねる浪岬の森をわが
獨り過ぐ

浪浪浪沖に居る浪岸の浪やよ待てわれも山降り
て行かむ

地よりいま生れしに似るあを海にむかひて語る
ふたつ三つの言葉

またもわれ旅人となりけふ此處のみさきをぞ過
ぐ可愛しきは浪

海は死せでありけり青き浪ぞ立ついたましいかな砂にわが居る

ただひとり知らぬ市街に降り立ちぬ停車場前に海あり浪寄る

海にひとつ帆を上げしあり浪より低し悲しや夕陽血に似て滴る

港には浪こそうねれ夕陽は浪より椅子のわが顔に映ゆ

たまたまに朝早く起き湯など浴び獨り坐りてむく林檎かな

庭の冬樹のはだえにあたる薄日のいろ、朝林檎をもとむるこころ

おとろへし生命の酸味のひややかに澄む朝なり手にとる林檎

なにやらむさびしき笑ひ浮きいづる片頬にあてぬつめたき木の實

うるはしき冬にしあるかな獨りさびしくこもれる部屋にけふも夕陽す

はらはらと降り來てやみぬ薄暗き窓邊の樫の葉に殘る雪

眼のまへに散りし木の葉に惶しくもの言はむとし涙こぼれぬ

森のなかにちさき畑あり夕日さす麥の青き芽いたましきかな

地よ感謝す汝とし居れば我がこころしづかに燃えて指も觸れ難し

わが手足われの生命のそのままに今日こそ動け死なむとぞ思ふ

木の根に落葉かき籍き手をあつる我が廣き額のなつかしきかな

その枝折りこの枝を折り一葉無き冬がれの森に獨りあそべり

信濃より甲斐へ旅せし前後の歌十六首のうち。

おなじくば行くべきかたもさはならむなにとて山へ急ぐこころぞ

問ふなかれいまはみづからえもわかずひとすぢ
にただ山の戀しき

さびしさを戀ふるこころに埋(うづ)れて身にこともな
し山へ急がむ

山戀ふるさびしきこころなにものにめぐりあひ
けむ涙ながるる

山に入り雪のなかなる朴の樹に落葉(からまつ)松になにと
ものを言ふべき

ただひともと伐り殘されし種子(たね)松(まつ)の喬(たか)くしげれ
り春となる山

ただ一羽山に烏の啼くことも幹にわが影のうつ
るもさびしや

枝もたわわにつもりて春の雪晴れぬ一夜やどり
し宿の裏の松に

雪のこる諏訪山越えて甲斐の國のさびしき旅に
見し櫻かな

をちこちに山櫻咲けりわが旅の終らむとする甲
斐の山邊に

見わたせば四方の山邊の雲深み甲斐は曇れり山
ざくら咲く

足袋ぬぎてわか草ふめばあぢきなやなにに媚び
むとするこころぞも　（植物園十首）

木木はみなそびえて空に芽をぞ吹くかなしみて
居れば踏む草もなし

折しもあれ春のゆふ日の沈むとき樅の木立のな
かに居りにき

さびしといふ我等がこころむきむきに燃えわた
りつつ夏となりにけり

はつ夏のときは樹の蔭の地にまろび帽ぬげばい
や戀しさの燃ゆ

植物園の松の花さへ咲くものを離れてひとり棲
むよみやこに

葉を茂みしだれて地に影の濃きこの樫の樹に夏
は來にけり

身にちかき木の根木の根をながめやりつめたき
春の地にまろび居り

立ち出でつとほく離れて見るときのかの樫の樹
の春はさびしき

四月十三日午前九時、石川啄木君死す

初夏の曇りの底に櫻咲き居りおとろへはてて君
死ににけり

君が娘は庭のかたへの八重櫻散りしを拾ひうつ
つとも無し

病みそめて今年もあはれさくら咲きながめつつ
君の死にゆきにけり

酢のごとき入日に浮む麥の穗の穗さきかなしや
摘まむと思ふ

わが蒼き片頰にあたる血のごときいろの入日を
貪り吸ふも

野は入日いばらのかげにありやなし水もながれ
て我が歸るなり

入日あかき野なかの村にひと群れて家つくり居
り唄の聲悲し

眼のまへを巨いなる浪あをあをとうねりてゆき
ぬ春のゆふぐれ　（鎌倉三首）

わだつみの浪の一ひら掌にもちて死なむとぞ思
ふ夕陽のまへに

並み立てる岬のあひにゆらゆらと海のゆれ居て
ゆふぐれとなる

■

いたづらに窓に青樹の葉のみ搖れわれらが逢ふ
日さびしくもあるかな

かなしき岬

うら若き越後生れのおいらんの冷たき肌を愛づ
る朝かな

笑みながらじつと見つむるまなざしに青みて夏
の朝は來にけり

なにやらむ妹女郎をたしなむる姉の女郎に朝は
さびしき

お女郎屋の物干臺にただひとり夏の朝を見にのぼるかな

初夏の朝の廊下のつめたきにまろびて起きぬ若きおいらん

桐の花うすく汗ばみ日ものぼりわがきぬぎぬのときとなりゆく

■

はつ夏の街の隅なる停車場のほの冷さを慕ひ入るかな

われ人もおなじ心のさびしさか朝青みゆく夏の停車場

●

しみじみと遠き邊土のたび人のさびしき眼して停車場に入る

朝な朝な停車場に來て新聞紙買ふ男居りて夏となる街

水無月の青く明けゆく停車場に少女にも似て動く機關車

午前九時起きも出づればこの市街はやも五月の雲にくもれる

五月末、相模國三浦半島の三崎に遊べり、

歌百十一首のうち。

あさなあさな午前は曇るならひとて今日も悲しく海をおもへり

戀ひこがれし海にゆくとて買ふシャボンわが蒼き掌に匂ふ朝の街

あらさびしやわが背のかたに少女居りほほ笑める如し海へのがれむ

明日ゆかむ海思ひをればゆきずりの街の少女もかなしみとなる

わが渡る五月の海に魚海月さびしく群れてさざ波もなし

海緣の五月の雲もわが汽船の濡れしへさきもうらがなしけれ

曇り日の汽船の機關に石炭をつぐ萠黃服海はわびしき

古汽船のあぶらの匂ひなつかしく身に浸み來て午後の海渡る

わが古汽船雲のかげりの浪をわけさびしき海をさすよ岬へ

雲深き岬へわたる古汽船のあとより起る夏の青浪

夏あさき岬のはなに立つ浪のなつかしいかなわが汽船を揺る

雲晴るれば海はにはかに紺碧の浪立ちわたり揺るるわがふね

青葉の岬ながきなぎさを打ちぬらし雨の走れば
ゆるるわが汽船

浪の穂にかすかにやどる赤きいろ夏の夕日のなやましきかな

皐月の、雲のかけりにうすき藍ひきうすき藍ひき
伊豆が崎見ゆ

あかあかと西日にうかび安房が崎相模の海に近
く寄るなり

少女子の青パラソルよりなほひろき麥藁帽を著
て海に入る

太陽の正面の岬きずつきて血のたる指し貝ひろ
ふかな

ゆふ浪や五月の海の道化者やどかりの子がせつ
せとはたらく

岬より入日にむかひうすうすと青色の灯をあぐ
る燈臺

あをやかに雙眼鏡にうつり出で五月の沖に魚釣
る兒等よ

なつかしく午後二時ぞうつ、風呂やわかむ、この窓
掛にゆるる海の日

月の出の巖の暗きに時をおき浪白く立ち千鳥啼
くなり

わが眠る崎の港をうす青き油繪具に染めて雨ふ
る

みな忘れよ崎のみなとのこのひと夜五月の雨が
ふりそよぐなり

旅人のからだもいつか海となり五月の雨が降る
よ港に

ほろびゆくこの初夏のあはれさのしばしはとま
れ崎の港に

ゆく春の海にな浮きそ浪ぞ立つかなしき島よと
く流れ去れ

あを海の岬のはなに立つ浪の消しがたくして夏
となりにけり

雲一片二ひら三ひら浮かずもあれ岬に立ちてわ
がなげく日に

海よ搖れよわれのいのちは汝よりつねに鮮かに
悲しみて居り

あをあをと雲にかげれる彼の岬このみさきいざ
とびて渡らむ

聲高く歌ひ終れば眼のまへの世界は蒼し死ぬに
かあらむ

海よ悲しあをき木の實を裂くごとく悔はわが身
につねに新らし

ゆらゆらと地震のわたれば身をくづし戸外の山
を見やるおいらん

耳すませばまこと梟にありにけりさびしき鳥を
きけるものかな

この遊女かならず夭く死ぬべけむそち向きのか
ほの夏の朝かげ

あたらしきうすむらさきのこの紙幣夏のみなと
の朝の遊女屋

わが二十八歳のさびしき五月終るころよべもこ
よひも崎は地震する

鰹賣ると月夜の海の魚のごと人こそさわげ崎の
月夜に

さらさらと蒼き月夜の浪ぞ寄る浪うちぎわに積
まれし死魚に

月の夜の灣(いりえ)のすみの砂原に聲のみの人の群れて
死魚賣る

あんまりに死魚賣る聲のかしましきに月夜のみ
なとわれも寢られず

夜をこめて崎の港に入り來る船は死魚積む船な
らぬなし

みどり兒の死にゆく如く月あをき崎の港を出で
てゆく船

ただひとり貝拾ひをれば午後の雲うすうす岬過
ぎてゆくなり

洞の暗きに貝とりつかれ見かへれば空にさびし
くあがる青浪

崎に立ち海のかなしきふくらみに岩を碎きて投
げつくるかな

誰となきうらめしき肌刺すごとくうす青き蟹を
追ひめぐるかな

夏となり何一つせぬあけくれのわれに規則のごとく齒の痛む

黑いろの蟲のやうなる商人がわが部屋に來てさいそくをする

うす青き夏の木の果を嚙むごとくとしの三十路に入るがうれしき

まづしくて蚊帳なき家にみつふたつ蚊のなき出でぬ、添ひ臥をする

かんがへて飲みはじめたる一合の二合の酒の夏のゆふぐれ

この熱い朝湯よ汗は出てしまへ青の木の葉の如くなりてむ

わがくせのながいかはやも何とやらたのしみとなり爲す事もなし

朝の飯すごすまじいぞこの心しんみりとゐて筆とりてまし

わが好きの眼とづるに似し心地今日もふらふら芝居見にゆく

指先に拭けばなみだにほんのりと汗もまじりて
夏はわびしき

夏の日の芝居の笛のかなしさよはやく夜となれ
曇り日となれ

友はみな兄の如くも思はれて甘えまほしき六月
となる

水無月や木木のみづ葉もくもり日もあをやかに
して友の戀しき

六月末、多摩川の上流なる御嶽山に登り
ぬ、歌七首

鐵道の終點驛の溪あひの杉のしげみにたてる旅籠屋

あをやかに山をうづむる若杉のふもとにほそき
水無月の川

多摩川のながれのかみにそへる路麥藁帽のおも
き曇り日

頰につたふ涙ぬぐはぬくせなりし古戀人をおも
ふ水上

搖るるとなく青の葉ずゑのゆれて居る溪の杉の
樹見つつ山越ゆ

ふるへ居る眞青の木の葉つみとりて瞼にあつる
山はさびしも

おく山の木かげの巖にかかりたるちひさき瀧を
見つつ悲しき

夏の部屋うつとりと繪本かさねたる膝のほとり
の朝のなやみよ

なかなかに繪を見ることもこの朝のおちゐぬむ
ねにかなしかりけり

けふも晴るるか暗きを慕ふわがこころけふも燃
ゆるか葉月の朝空

夏はいまさかりなるべし、とある日の明けゆくそ
らのなつかしきかな

やはらかき白の毛布に寢にもゆく晝のなやみか
佛蘭西へ行く　（山本君を送る）

わが薄き呼吸も負債におもはれて朝は悲しやダ
ーリアの花

うつとりとダリアの花の咲きて居り、ひとのなや
みを知るや知らずや

肺もいまあはき勞れに蒼むめりダリアの園の夏
の朝の日

とほり雨朝のダリアの園に降り青蛙などなきい
でにけり

とほり雨過ぎてダリアの園に照る葉月の朝の日
のいろぞ憂き

夏の樹にひかりのごとく鳥ぞ啼く呼吸あるもの
は死ねよとぞ啼く

みなかみ

故郷

ふるさとの尾鈴の山のかなしさよ秋もかすみの
たなびきて居り

草山に膝をいだきつまんまろに眞赤き秋の夕日
をぞ見る

草山にねてあるほどにあかあかと去にがてにす
と夕日さすなり

阿蘇荒れの日にかもあらめうすうすとかすみの
ごとく秋の山曇る

母が飼ふ秋蠶の匂ひたちまよふ家の片すみに置
きぬ机を

ふた親もわが身もあはれあかあかと秋の夕日の
かげに立つごとし

いづくにか父の聲きこゆこの古き大きなる家の
秋のゆふべに

まんまるに袖ひきあはせ足ちぢめ日向にねむる、
父よ風邪ひかめ

父よなど坐るとすればうとうとと薄きねむりに
耽りたまふぞ

とりわけて夕日よくさす古家の西の窠邊は父の
よく居るところ

ほたほたとよろこぶ父のあから顔この世ならぬ
尊さに涙おちぬれ

わがそばにこころぬけたるすがたしてとすれば
父の來て居ること多し

二階の時計したの時計がたがへゆく針の歩みを
合はせむと父

老いふけし父の友どちうちつどひ酒酌む冬の窓
の夕陽

蜜蜂も赤く染まりて夕日さすかなしき軒をめぐ
るなりけり

煙草の灰がぽつたりと膝におちしときなつかし
き瀬の音聞えくるかな

おお、夜の瀬の鳴ることよおもひでのはたととだ
えてさびしき耳に

すばかりちひさき繪にも似て見ゆれおもひつめ
たる秋の東京

爲すことみな悔とならざるなき我が日今朝も新
しく輝きてあり

愛すべきは朝の光線なりまことに光線にむかへ
る我が疲れし瞳なり

健康の完かりせばこのさびしさ消えむかとおも
ふ、朝、冷えし鏡

あはれ悲し玉にくもりのなきごとく健かならむ
健かならむ

われを恨み罵りしはてに噤みたる母のくちもと
にひとつの齒もなき

母が愛は刃のごときものなりきさなりいまだに
そのごとくあらむ

夕されば爐邊に家族つどひあふそのときをわれ
はもとも恐れき

わづかの酒に醉ひては母のつねに似ずくちかろ
く、夜のかなしかりけり

あはれ今夜のごとく家族のこころみな一いろに
あれ一いろにあれ

姉はみな母に似たりきわれひとり父に似たるも
なにかいたまし

あはれみのこころし湧けるときならむしみじみ
ものいふ母の悲しも

くづ折れてすがらむとすれど母のこころ悲哀に
澄みて寄るべくもなし

うちつけにものいふことをも恐れ居るその兒を
なほし憎みたまふや

家に出づる羽蟻の話も案のごとくこの不孝者の
うへに落ち終りけり

母、姉、われ、涙ぐみたる話のたえま魚屋入り來ぬ、魚
の匂へる

その障子もこの窓もみなしめきりて冬の夕陽に
親しみて居り

椅子ながら山山の間の落日を見居れば、二階、父の
入り來ぬ

葉よりさらにみどりに透けるちさき蟲薔薇の葉
に居りき、夕陽に透ける薔薇に

薔薇の葉を喰ふ蟲を見出しこの部屋のなにやら
明るくなりし思ひす

信ぜむとねがひ信じたりとおもひ思へどもここ
ろの何處にか細き風吹く

わが朝夕の生活をうすき板のごとく思ひて裏よ
り覗かむとする

起き出でて戸を繰れば瀬はひかり居り冬の朝日
のけぶれる峽に

靜かなれ冬の日、わきてけふ一日、朝よりこころ死
せるがごときに

机のうへの二りんの薔薇にも愛憎の湧く日なり、
眼昏し

青杉の大枝をさせば北窓の机小暗しわれの讀書
に

黒薔薇

納戸の隅に折から一挺の大鎌あり、汝が意志をまぐるなといふが如くに

新たにまた生るべし、われとわが身に斯く云ふとき、涙ながれき

靜かにいま薔薇の花びらに來て息へるうすきいのちに夜の光れり

こころづけば鏡に薔薇がうつりてあり、つとわが顔の動けるそばに

ふと觸るればしとどに搖れて陰影をつくるくれなゐの薔薇よ冬の夜の薔薇よ

ひらかむとする薔薇、散らむとする薔薇、冬の夜の枝のなやましさよ

悲しみとともに歩めかし薔薇、悲しみの靴の音をみだすなかれ薔薇

吸ふ呼吸の吐く呼吸のわれの靜けさに薔薇のくれなゐも病めるが如し

やうやくに馬の跫音のきこえきぬ悲しき夜も明
けむとすらし

机の前の夜の山よりまひて來し濃みどりの蛾の
とびてやすまず

灯を消すとてそと息を吹けば薔薇の散りぬかな
しき寢覺の漸く眠りを思ふときに

家のいづくにか時計ありて痛き時を打つ、陰影よ
り出でよ、出でよとて打つ

陽を浴びつつ夜を思ふはこころ痛し、新しき不可
思議に觸るるごとくに

脂肪にや額の皮膚のこはばれる或る冬の日の午
後、多き蜂

この山梔子の實に似ても靜かなれかし、何故にわ
れの斯くあはただしきや

高き窓より一すぢの薄明り、さすけなれども冷し
わが眼

窓より光線を見るも厭はし、わが眼松の皮となる
に似たれば

ラムプを手に狹き入口を開けば先づ薔薇の見え
ぬ、深き闇の部屋に

忘れものばかりしてゐるやうな、おちつきのない
男の机の鮮紅薔薇（ウインターローズ）

晝は晝で、夜は一層（いつそう）薔薇が冷いやうだ何しろおち
つかぬ自分の心

薔薇が水を吸ひやめたやうだ、玻璃（がらす）の瓶の冬のば
らが

朝など、何だか自分が薄い皮でもあるやうに思
はるるときがある

冷い、冷いと心（しん）からふるへて爐のそばに寄つてゆ
く、朝のわが身をいとしいと思ふ

父の死後

あなかしこし靜けき御魂（たま）に觸るるごとく父よ御
墓にけふも詣で來ぬ

御墓ちかづく、墓場小暗き坂みちにこころは黑の
玉とかがやき

喪（も）の家（いへ）の爐邊（ろへん）、榾火（ほだび）のかげに赤き母が指姉がゆび
我が指のさびしさよ

いろいろに考ふれど心に染むことなし、來む明日
さへ、おもへば恐し

空にひくき冬の朝の太陽、底無しのさびしき夜よ
り出でて來しわれ

起きいづれば太陽はとく峰にあり、氷れる溪にの
ぞみたる家

思ひだしたやうに水仙が匂ふ、水仙が匂ふ、朝の讀
書の机に

何にもあれ貧ることに倦みて來ぬ、わびしや友情
にも

靜坐に耐へられなくなれば、ついと立つ、立つて歩
く、貧しい心そのもののやうに

人がみなものをいふうとましさよ、わがくちびる
のみにくさよ

わがたいくつの夜に蟇の啼くが聞ゆ、雨もまばら
にわが心にふりそそぐ

こころの闇に浸みる瀨の音、心のうつろに響く瀨
の音、瀨の音、瀨の音

溪の瀨のおとはいよいよ澄みゆき夜もふかめど
いづくぞやわがこころは

海及び船室

一月初旬より二月初旬にかけ、九州の沿岸を一周せり、歌四十四首のうち。

闇のうちにあまた帆ぞ鳴る、帆ぞ動く、わが汽船の
漸く動き出でむとする港に

船室の窓よりやはらかき朝日きたる、いでわがい
としき麥酒を呼ばむかな

身體(からだ)は皮膚のみのごとくつかれたり、船室の窓よ
りかなしき朝日きたる

すれすれに岬の絶壁を過ぐ、わが船室の時計のお
と

風出でて浪ぞ立つ、朝日いまだ低くして陰翳(かげ)のみ
多き海に

わが顔にまともにさせる濃き朝日、船は搖れに搖
れ、濃き朝日

朝の甲板(でっき)にざあざあとして水そそぐ、濃き陽のな
かの四五の萠黄服

乘換驛、待ちゐし汽車に乘りうつる窓にま白き冬の海かな　（小倉驛）

大海の荒れの岸邊の浪のかげに人群るる見ゆわが冬の汽車

風たてば有明の海は大いなる白き瀨となる、わが小蒸汽船よ

有明の海のにごりに鴨あまたうかべり、船は島原へ入る

冬雲のかげりに暗き島、岬、憂き島原へわが船は入る

船に乘り海を渡る、なんのたのしみぞ、船に乘り緣もなき海を渡る

うるはしく笑ふものかな、笑ふなかれ、わがさびしさに相觸るるなかれ

箱崎の濱のしら砂ふみさくみ海のなかみち見れば、かなしも　（海の中道は岬の名なり）

冬山の國ざかひなるいただきを搖れまがりつつ行けるわが汽車

櫻島はけむりを噴かぬ島なりき、あはれ死にたる火の山にありき

海の黒さよ、ほそぼそとしてうかびたる佐多の岬
の夕日の濃さよ

浪高み船のあゆみの遅さよな、みさきの端の白き
燈臺

やよ窓に灯をともすなかれ、海はいま薔薇いろに
暮る、やよわが黒船

やよ老人、いま船室には君とわれのみ我がさかづ
きをねがはくは受けよ

船は搖るれども歩むともなし、窓に黒く月夜の陸
が見ゆれども動かず

日向美々津港附近にて

あはれ悲し、いで衣服をぬがばやと思ふ、海は青き
魚のごとくうねり光れり

絶壁を這ひあがる、黒き猫とや見えむ、いまかなし
き絶壁を這ひ上る

岩角よりのぞくかなしき海の隅にあはれ舟人ち
さき帆を上ぐ

悲しみに身もいらち、黒く巨いなる岩のかげに尿
をぞする、海青く動く

うれしうれし、海が曇る、これから漸く私のからだ
にもあぶらが出る
身體は一枚の眼となりぬ、青くかがやける海、ひら
たき太陽
岩のあひだを這ひて歩く、はだしで、笑ひて、浪とわ
れと
下駄をぬいでおいたところへ來た、これからまた
市街へ歸るのだ
この帆にも日光の明暗あり、かなしや、あをき海の
うへに

水平線が鋸の刃のごとく見ゆ、太陽の眞下の浪の
いたましさよ
わが窓の冷たさよ、海はけふ實にいく度びか色彩
を變へけむ
少女よ、その蜜柑を摘むことなかれ、かなしき葉の
かげの
ひややかに海より廣き帆の來りぬ、港の旅館の窓
のまへに
光なき海、濃き藍色にたたえたり雨晴れむとして
一羽のしろき鳥

闇夜の波は戀するをんなの指のごとし、小ラムプ
とわれとの窓のしたに
精力を浪費するなかれはぐくめよと涙しておも
ふ、夜の濤に濡れし窓邊に
かなしき月出づるなりけり、限りなく闇なれとね
がふ海のうへの夜に

再び同じ所にて

とある雲のかたちに夏をおもひいでぬ、三月の海
のさびしき紫紺

春の日の眞黑き岩にあふむけにまろがりて居れ
ば睡眠さしきたる
太陽にあたためられしこの黑きおほいなる岩に
いざやねむらむ
われ知らずうたひいだせるわが聲のさびしさよ、
春日、紫紺いろの海
をちこちに岩のとがれる、陰翳おほき午後四時の
紺の海となりにけり
岩かどに著物かきさき爪をやぶりきりぎしを攀
づ、椿折るとて

高まりたかまりつひに碎けずにきえゆきし曇り
日の沖の浪のかけかな

なみ高し雨後の春日をはらみたる綿雲のかげに
みさご啼くなり

椿の花、椿のはな、わがこころもひと本の樹のごと
くなれひとすぢとなれ

わびしき濱かな、貝がらのくず砂のくずいざやひ
ろはむ、海も晴るるに

夜の雨しじにふるなり、沖津邊はかすかにひかり
かすかに光る

よるの雨そこともわかぬ海岸にほのじろき泡の
つづくなりけり

潮引きてあらはれし岩に鷗居り空みて啼けば降
りくるがあり

おのづから盲目のごとく岩を踏む、海見れば湧く
おもひさびしも

夕陽に透き浪のそこひに魚の見ゆ、あるまじきこ
と思ふべからず

默然と岩を見つめておもふこと、ひとに告ぐべき
きはならなくに

をんなの匂ひなりけり、ふと雲がわたれば海のあ
をくかげれる

たらたらと砂ぞくづるる、わが踏めば砂ぞくづる
る、ある色の海の低さよ

海もいま倦むらし、わが靈魂は曇らむとす、いづく
に動き行かむとするや小蟹よ

不の葉にも盛れるがごとく海は小さし、わが命燃
え燃えて一すぢの青き煙たつ

椿の木、椿の木わが憂愁に、きらきらとひらたき海
のうつりかがやく

ふと浪にむかひてうすく笑ひけりあやふき岩を
降りはてしとき

海よかげれ水平線のくろみより雲よ出で來て海
わたれかし

鳥のおほさよちひさき波のたちさわぎ海あさあ
さとかげりきたりぬ

醉樵歌

われも木を伐る、ひろきふもとの雜木原春日つめ
たや、われも木を伐る

春の木立に小斧振ることのかなしさよ、前後不覺
に伐りくづしけり

春の木は水氣ゆたかに鉈切れのよしといふなり
春の木を伐る

峰高み海見をすれば春がすみをどめるをちに青
く見ゆかに

あの山この山粘土細工のごとくにも見えきたる
なり淋しみて居れば

人聲ぞとおもへば烏にありにけり春日けぶれる
みねの松山

見おろせばふもとに山の幾うねりうねれるにみ
な松の生ひたる

なにはあれ第一の峰にのぼらむとかすめる山の
背を歩み居り

深山わけ入り朽木の松のふしを掘るその松の節
たいまつとなる

けむりありて山に野火燃ゆ、くもり日のひかれる
そらを啼きゆく烏

太陽のかげりてゆけば悲しみつ雲いでて照れば
よろこびぬ峰のとがりに

わな見にとまだきに行けばおほいなる兎かかり
居りわれを見て鳴く

霞に濡れて黑くつめたく山がせまる、窪地のしげ
みに雉子待つわれに

かすんだ山にをりをり風が來る、樹が鳴る、わが手
の銃のつめたさよ

我がかなしみに火をつけるやうに、地團太踏みて
鳥を逐ふなり

見知らぬ窪地の灌木原におりて來た見廻せば見
まはせば春の鳥啼く

傷つきて鳥かかりたる喬木に攀ぢむとて走せ寄
れば青き樅の樹

■

テーブルの上いつぱいに枝はひろがり咲き群が
る躑躅、夜の青い瓶

ペンさきに滲み出るインキ、ふと顔をあぐれば顔
をつつめるつつじ

夜になれば健康の恢復して來るごときわが身體、
ランプのかげの躑躅

不眠症ととざさぬ窓と戸外の闇と、ときどき机に
落つる赤い躑躅

不眠症のラムプのかげのわが夜明、瓦たたきて雨
ふりしきる

すずしげに顔の感覺はたらけり後のつかれを思
はずもがな

■

わけとてはなくぢだんだを踏んでよろこんでみ
た、喜んだとてなにになろうぞ

居るところを失くしたこころがうつとりとかな
しい日光を見つめて居る

遠い麓に杉の木がまばらに立つて居る、人の生に
ある悲哀のやうに

からくりめけるわれのこころのはたらきのはた
と止まれり、雲雀うららうらら

この國に雪も降らねばわがこころ乾きにかわき
春に入るなり

鶺鴒が雲雀の聲によく似るとこころに云ひてあ
ふぐ春の日

曇日のかすみのなかに鳥啼き鶺鴒啼き溪にのぞ
みてこの窻の高さよな

じつと忍んで見て居れば、蟇が啼く、大きな咽喉を
あけて春の日に啼く

オヤ、そこにも啼く、なかに椎の樹二三本、けらけ
らと蟇啼きかはす

蟇の眼のかなしさよ、つまが戀しとひたなきに啼
くその蟇の眼

踏めばくづるる山の赤つち、乾いた土、どこにしの
んで蟇の啼くぞえ

ほろほろとつちのくづれて墓の啼く、きりぎしの
春のつちのわれめに

なやましき匂ひなりけりわがさびしさの深きか
げより鰭ふりて來る

をんなが濡れた繪具のごとくそばを通る、つめた
いさびしい春の一日

我がうてるうさぎ雉子の肉つねに厨の釘に絶え
ざり、春暮れかかる

朝の園爐裡猫もとりわけあまゆるをあやしてあ
れば啼けるうぐひす

けふも雨ふる、蛙よろこびしよぼしよぼに濡れて
櫻も咲きいでにけり

春雨にみかさまさりて谷ぞこを石のながるるね
ざめてぞ聞く

春の日のぬくみかなしも、ひたすらに淺瀨にたち
て鮎つり居れば

瀨の鮎子わが痩脛もきよらかに寒みいたみて春
はゆくなり

いだ釣ると春の川瀨につどひたるふるさとびと
ら黑き衣著る

海いろにうちかげり居りかづら取るとてわがひ
とり入る尾鈴の山は

いとながきかづらにありけり青きかづら引けど
も引けども盡きむともせず

春の日や老いしかづらのあをあをと葉をつけて
居り青かづら引く

いとながく青きかづらをわれの引く身うちのち
からこめてわが引く

ぬすみする人のごとくにひそひそと深山にひと
りかづら引くなり

夏の日の苦惱

我が赤兒ひた泣きに泣く地もそらもしら雲とな
り光るくもり日

妻はしたにわれは二階にむきむきにちさき窓あ
けくもり日に居る

片手のばせばとなりの屋根にとどくなりわれの
二階のまどのくもり日

啼きまよひ鳶こそ一羽そらにまへくもり日もわ
れも流れ流るる

一枚の亞鉛のいたのうす板のきらめき光るわが
こころかな

油なすものうさつらさほてほてとからだほてれ
ど空を見てをり

うつうつと浮かずなげかずかなしまぬこのここ
ろ何にならむとすらむ

梅雨雲の空に渦まき光る日はこころ石とも冷え
てあれかし

あやふきはこころなりけりゆらゆらに甕にまた
く滿ちてうごかず

大いなる呼吸一つ吐かむねがひにて曇りにおも
き窗はひらけど

夏深しいよいよ痩せてわが好むつらにしわれの
近づけよかし

雜草に花咲くごとくいまのわが唇より聲のたえ
ず出づるも

わが顏は酒にくづれつ友がかかほは神經質にくづ
れるにけり

踏みもせよなげうちもせよしかはあれ折れくづ
れむちから今はわれになし

おほいなるぱいぷ買ひたし大いなるぱいぷくは
へて睡りてありたし

曇り日の光りの中に蚋なきて汗ひややけきわが
身をめぐる

朝まだき夏の市街のかたすみの酒場に醉ひをれ
ぱ電車すぎゆく　（山蘭と飲む二首）

夜ふけし夏の銀座のしきいしのつめたきを踏み
よろぼひあゆむ

木綿蚊帳わが兒ひしひし泣きいづるあかつきと
はやなりにけるかな

いつしかに頭かたぶけ晝のまどとほき電車を聞
いてゐるにけり

兒をあやすとねぢをひねればぽつかりと晝の電
燈つきにけるかな

大木の群れて暗きをおもひいで植物園に行かむ
とぞ思ふ

植物園にゆかむと思ひ憂しと思ふ晝の電燈とも
りたる部屋に

わが頸のみぢかきことを悲みぬおほいにわれを
ののしらむとし

指もてつまめば汗ぞしみらに光り居りはだえさ
びしや蟬啼きやまず

くもり日に啼きやまぬ蟬と我が心語らふ如くお
とろへてをり

しとしとに汗は湧けどもうちつけに暑しともな
く萎え居るなり

ものうしやあまりに瓜をはみたれば身は瓜に似
て汗ばみにけり

秋風の歌

秋風の歌

音に澄みて時計の針のうごくなり窓をつつめる
秋のみどり葉

夕かけて照りもいだせる秋の日にさそはれて家
を出でにけるかな

かの欅あはれならずや秋風にい群れて蟬の啼き
も入りたる

秋の葉の日に光るかなひそひそと急ぐははやも
散りしきりつつ

かなしきは日の光なり秋の樹にしとどに青葉散
りしきりつつ

秋の森に蝶こそ一羽まひ出でたれやがて青葉に
とまりてうごかず

玉に似てこころふとしも靜まりぬ路傍のおち葉
踏むに耐へむや

わがこころの底ひにものを見むとするさびしさ
のなかにけふもこもれり

食はむとてしばしおきたるうす青の林檎に蜂の
とまりゐるにけり

くだものの皮を離れぬ秋の蜂ちさきをみつつ涙
ぐみける

朝ぐもりはれゆく空に風ぞ見ゆさびしさに酒を
わがのめるかな

いつしかに夏はすぎけりきりぎしの赤土原に蟻
の這ひをり

いつしかに夏はすぎけりただひとり野中の線路
われの横ぎる

脚ひとりちからをおほえかぎりなく歩まむとす
る晩夏の野や

かにかくに靜かに眠れこころより滿ちたらひな
ば起きておもへよ

夜の雨なれがこころはいづくぞとわが身つつみ
て降りしきるなり

しみじみとあふけば夜の雨のつぶいづれか胸に
しまざらめやは

ねがはくはひらかき板にふるごとくわれのここ
ろに降るな夜の雨

眼ひらけば紙の障子があかあかと夕日に染みて
風もきこゆる

夜の雨にぬれゆく秋の街並木ぬれつつわれも歩
みてをりき

■

あはれ悲しここらダリアの花を折り倦める心を
とりよそはばや

默然とダリアの花に見入りぬればこころしばら
く晴れてゐにけり

園丁は黒き帽著つ一心にダリアの蟲に取り入りて居り

たけたかきダリアの園にほそほそと吹く秋風は雨の如しも

園丁の黒帽子よりなほ高くそびえて風に咲いてゐるなり

分秒と時間を惜むこころもち重きまぶたを瞑ぢむとはする

顔色のややに赤きは健康かこの倦みごこち何の故ぞも

苦き木の根をひねもす嚙みて居りぬべしこの蒸心地やるよしもなき

わが額の痩せおとろへに似もつかずつめたきあぶらにじみたるかな

秋の樹の濡れて窗をばつつめるにこころいらだち煙草をぞ吸ふ

紙の障子にせまきガラスのはめられつ冷き秋の庭園の見ゆ

雨まてる窗べに雨のふりて來ぬ今は身を投げやすらかにあらむ

空のそこひに赤みを宿し夕雨のさと落ちてきぬ
わが細き窻に

日に白みとほき林を吹く風のさびしいかなや四
方をとざせり

骨と肉のすきをぬすみて浸みもいるこの秋の風
しじに吹くかな

いとどしく心あやふく傾きてやぶれむとするに
風風ぎにけり

おほらかに風無き空に散りて居る木の葉ながめ
て窻とざすかな

夜の讀書は海に青魚のあそぶよりかなしいかな
や風の聞ゆる

いたづらに咽喉のあたりに呼吸をする生物の如
く寢ざめてありけり

わが居るは風のゆくゑにあるごとく呼吸を引き
つつきいてるたりき

吸ふいきの吐く呼吸のすゑにあらはるるさびし
さなれば追ふよしもなし

生きたるもの死にたるもののけじめさへ見わか
ずなりて涙こぼるる

きりきりと齒さへ痛めどこのこころとりなほし
えでつかれはてにけり

とぢし窓いらだつこころけはしきに耐へつつ風
を聞いてゐたりき

しみじみとおとぎ噺をかたり合ふ兒等ありき街
路の夕やみのなかに

秋霧の茄子のはたけに人居りきやがて車を曳き
て去りにけり

乏しきを拾ふが如くをりをりに鏡とりいでつら
をながむる

古時計とまれる針の錆びはててむなしきかたを
さしてゐるなり

齒も碎くるばかり一氣に嚙みしめむよろこび事
にいまだ會はなくに

ばらばらと夜の障子を打つ雨におびやかされて
戸外に出でゆく

つめたきは風にありけりわがこころ白布の如く
吹かれたるかな

わがちさきまどに隣れる病院のガラス障子はい
つも閉(しま)れり

白き帽子白き衣著しをとめ等の群れて笑へりガ
ラス戸ごしに

いそぎ足廊下を通ふ看護婦をガラス戸ごしにな
がめてぞ居る

とりとめて病めりともなく楢の葉のまばらに染
まるこころなるらむ

病院のことのみ思ひ居しがふとわが手のよごれ
に氣づき洗ひにと立つ

四邊(あたり)みなつめたき日なりわが心の疲勞(つかれ)衰弱(おとろへ)をの
み思ひてをれば

秋風の海及び燈臺

東京靈岸島より乘船、伊豆下田港へ渡る

ことことと機關のひびきつたひくる秋風の海の
甲板の椅子かな

蛙なすちひさき汽船あき風の相模の海にうかび
ゐにけれ

伊豆の海や入江入江の浪のいろ濁り黄ばみて秋
の風吹く

伊豆の岬に近づきしころ風雨烈しく船
まさに覆らむとす。

ひたひたと濤はわが頰をなめて過ぐ船室の窓に
怒るわが頰を

走りかね蛙の如く這ひゐつつ汽船くだくるも死
ぬまじとする

雲さけて落日は海に漏れにけり赤きにうかび濤
の立つ見ゆ

あはれ陸見ゆ白なみがくれ岩も見ゆ死ぬまじ死
ぬまじ汽船は裂くとも

屍に烏よるごとくゆふぐれの伊豆の岬に白き浪
寄る

ふと時計の振子とまりし如くにもこころ冷えき
て暴風雨を見るなり

ゐびす丸甲板ふみたたき、ゐびす丸つひに下田に
入りにけらずや

下田港より燈臺用便船に乘りて神子元
島に渡る、樹木なき岩礁なりき。

船は五挺櫓漕ぐにかひなの張りたれど濤黑くし
て進まざるなり

大濤の蔭を漕ぐとき手もぬれず船はいはほと動
かざりけり

船子よ船子よ疾風のなかに帆を張ると死ぬる如
くに叫ぶ船子等よ

大うねりかたむきにつつ落つるときわが舟も魚
となめなりけり

次ぎのうねりはわれの帆よりもたかだかとそび
えて黑くうねり寄るなり

鯨なすうねりの群の帆のかげに船子等は金屬と
光りゐにけり

はたはたと濡帆はためき大つぶのしぶきとび來
て向かむすべなし

やと叫ぶ船子等のこゑに驚けば海面くろみ風來
るなり

とびとびに岩のあらはれ渦まける浪にわが帆は
かたむき來る

やうやくに帆に馴れ浪に馴れにつつこころゆる
めば海は悲しき

泡だてる岬をややに離れくれば沖は風ぎゐて雲
にかげれり

船子だちの若きはねむり老いたるは風のはなし
をわれに聞かする

笛の如わが小さき帆のなりはためき沖をはせつ
つ潜水夫を見たり

しばらくも搖れのやまざる沖にしてをんなの聲
をきくは悲しき

遠ざかる潜水夫の舟をさびしみてわが帆をみれ
ばぬれてゐにけり

飛沫ちりわが帆のなかばぬれたるに雲を漏れつ
つ日の射しにけり

いろ赤くあらはれやがて浪に消ゆる沖邊の岩を
見てはしるなり

その島にただ燈臺立てり、看守K―君は
わが舊き友なり。

友が守る燈臺はあはれわだ中の蟹めく岩に白く
立ち居り

岩あかく崖もひとしほ濁血の赤かる島の友が燈
臺

おほいなる岩のいただき黒蟻と見えつつ友はも
のを振りをり

やと叫ぶ聲かもすがた目には見えいまだまつた
くきこえざるなり

友がよぶ赤き斷崖見あげつつ舟をつけむと浪と
あらそふ

岩赤きその島にしも近づけば浪はいよいよ荒れ
て狂へり

赤岩の十丈にあまるきりぎしを這ひつつややに
友の下り來る

むらだてる赤き岩岩飛びこえて走せ寄る友に先づ胸せまる

顔も蒼み人に餓ゑたる餓心地火の如き手をとり合ひにけり

別れゐしながき時間も見ゆるごとさびしく友の顔に見入りぬ

歩みかね我が下駄ぬげばいそいそと友は草履をわれにはかする

友よまづ吾の言葉のすくなきをとがむな心何かさびしきに

相逢ひて言葉すくなき友どちの二人ならびて登る斷崖

石づくり角なる部屋にただひとつ窓あり友と妻とすまへる

その窓にわがたづさへし花を活け客をよろこぶ若きその妻

石室のちひさき窓にあまり濃く畫のあを空うつりたるかな

ただひとり淵にのぞめる心地しつ椅子に埋れて
酒をまつなり

盲目(めしひ)にて目とぢて今宵ひとりにて飲みてあらむ
と椅子に埋るる

夕かけて風吹きいでぬ食卓の玻璃(はり)の冷酒(れいしゅ)のうへ
のダーリア

わが目いま魚の如くに細くなりつめたくなりて
夜に入るなり

厭はしきにたへむとするはあだなりとささやく
酒は月いろにして

金屬の匂ひしにつつ背の方の燈火(ともしび)いたく更けし
づみけり

我がまなこちりのくもりも帶びぬ夜にもののう
つるはあはれなるかな

テーブルの白布の上にはらはらと夜の白雪ちる
と思へり

ひとり去り二人去りつつ夜の部屋われのみひと
り飲めるなりけり

みな去れ冷き部屋となして去れ夜の椅子にわれ
のひとり飲めるに

動かじな動けば心散るものを椅子よダリアよ動かずもあれ

風わたる戸の面の庭木見やるさへいとはしくして酒を飲むなり

つめたきは湧きし血しほかひいやりと灯(ともしび)のかげに身ぶるひをする

さびしき周圍

わくら葉の青きが庭に散りてあり朝はひとみのわびしいかなや

死せる鳥むれつつ空やわたるらむわが日はけふもさびしう明くる

思ふままにふるまひてさてなりゆきを見むと思ふに心冷(つめた)し

言葉とわれとはなれ離れにあるごとき冷き時に
いつ逢はるべき

われならぬ人居りてけふもわがごとくわびしき
ことをして居たりけり

とりとめて何も思はぬ時多し葉の散る如きわが
身なるらむ

ふかきよりうかびいでつつ心ややあらはになり
て悲しみてゐき

こよひまた眠られぬ身に凍みひびく冬の夜雨は
神のごとしも

夜の市街もわが身もしとど凍みとほり氷れとご
とく時雨ふるなり

時わかず心冴ゆればわれと身のおきどころなく
さびしかりけり

あはれこは醜くも市街をゆくものか思ひあまり
てせんすべもなく

電車よりとびおりするな死にやせむこのごろの
ごとうつつなければ

さびしさの凍れるかたへ妻も子も老いたる母も
動きゐるなり

わが如きさびしきものに仕へつつ炊ぎ水くみ笑
むことを知らず

妻や子をかなしむ心われと身をかなしむこころ
二つながら燃ゆ

照りくもり空のをちこちゆきちがふ冬雲の群を
窓にいとへり

■

天つ日の匂ひしづかに身にもしみあはれしばし
は眠れこころよ

吹きすぎし風のたえまにほつとりと日の匂ひこ
そ身によどみたれ

ことさらに鳥も啼くがに思はれて落葉木立を立
ちいでにけり

■

たましひのけぶるといふはあまりにも淋しから
ずや戀となれかし

身に燃ゆるは新しき戀あるはまた埋れゐし夢か
にかくにもゆ

こころさへ身さへ落葉のいろもなくさびはてて
いま燃ゆるこの戀

冬空のあまり乾けば市人もひそかに雪をまつに
あらずや

地を踏めど地にいらへなく心のみくくとひびき
て人の戀しき

■

雪どけの軒のしづくにいざなはれ友見まほしく
家を出にけり

片幹にこほれる雪のけぶりつつ入日の中に立て
り欅は

枯木立木木より雪の散りやまず行きずりの身に
西日赤しも

おのづから悲しき聲にいでてなく雪の日の烏西
日にきこゆ

雪ふかき落葉の木の間入日さしあまりてここの
窻を染むるも

わがそばに火ありて水を煮るを得べし玻璃のう
つはに水も滿ちたり

火をたたじ沸湯(にえゆ)たたじとつとめつつさびしさに
或夜起きてゐるにけり

なすべきをなさざる故にこの如くさびしきもの
となりしやわれは

■

春來(はるき)ぬとこころそぞろにときめくをかなしみて
野にいでて來しかな

青草の岡にいであひこらへかね泣ける涙のあと
のさびしさ

春の雲照りつつ四方をとざせる日高きに立てば
わが世悲しも

鶯の啼きてゐるにけり久しくも忘れゐし鳥なきて
ゐるにけり

つかれはてすわれる岡のもとをすぎ春あさき日
の小川流るる

おほぞらに垂れつつ春の雲光りここの林に鳥む
れ騒ぐ

大正四年四月二十日印刷
大正四年四月廿三日發行

行人行歌
定價六十錢

著者　若山牧水

發行者　東京市神田區佐久間町四ノ二三　植竹喜四郎

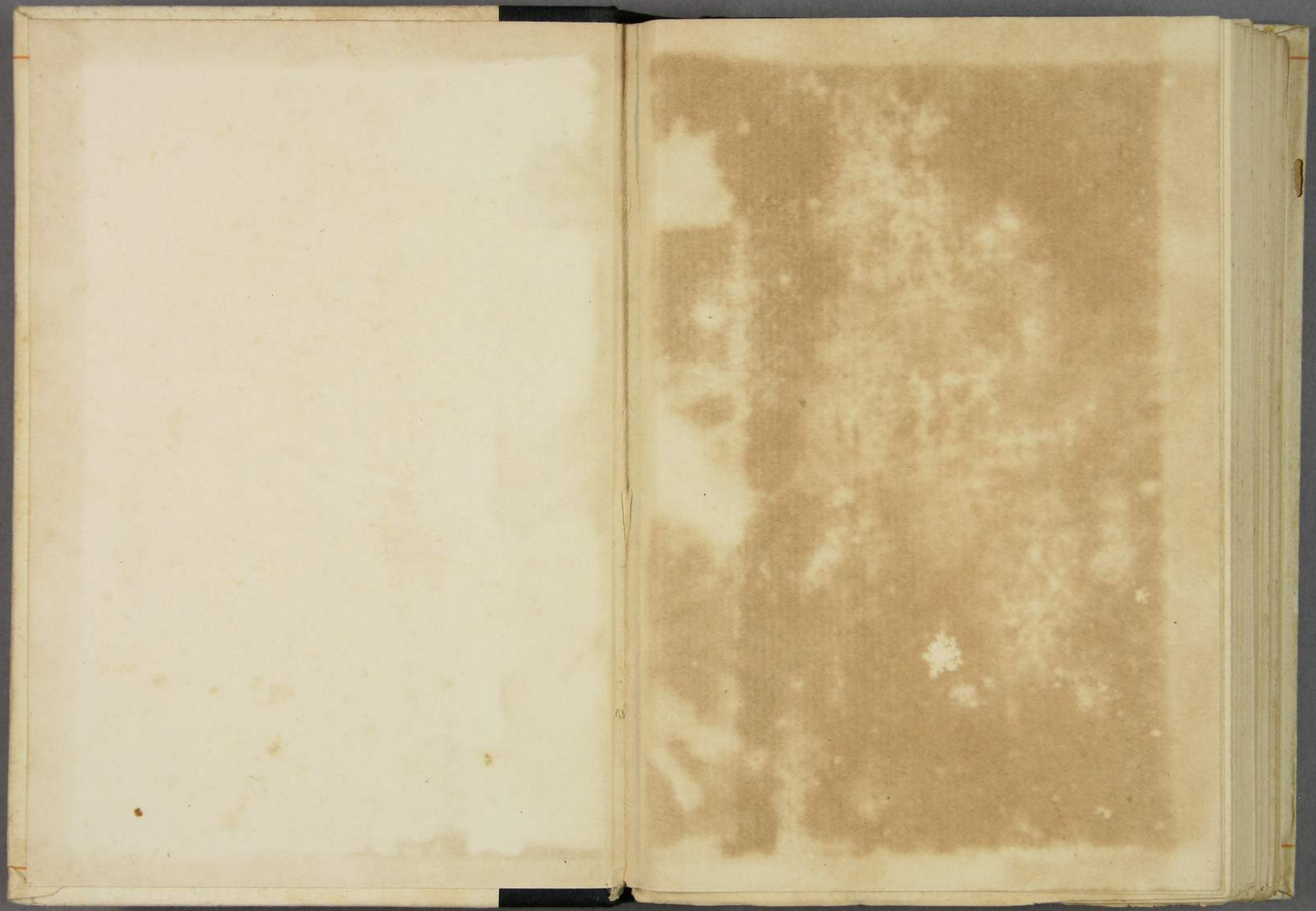
印刷者　東京市本所區番場町四番地　朝岡平藏

不許複製

發行所　東京神田區佐久間町四丁目二十三番地　植竹書院
振替東京一二九五三・電話下谷三四一九

—印刷所　凸版印刷株式會社本所分工場—

（福神製本）

現代和歌選集叢書

第一篇	第二篇	第三篇	續刊
夕暮名歌選集	牧水名歌選集	哀果名歌選集	空穗選集
黑曜集	行人行歌	萬物の世界	勇選集
菊半截・繻子製表紙 定價六十錢	繻子と絹の裝幀 定價六十錢	菊半截箱入美本 定價六十錢	白秋選集
			信綱選集
			柴舟選集
			以下交渉中